ＨＯＨＯＭＡＫＩＮＧ

盛

Night 13

地獄門

第三稿

脚本＼小中千昭

Teleplay by Chiaki J. Konaka

2003＼12＼26

登場人物

黒井　ミサ

田上　寛

賀茂　康生……都市デザイナー

伊澤　亮子

リリー

佐橋　恵理

倉橋みすず

須田　薫（に似た影）

岸田　嘉彦

岸田　雄彦

桜木周一郎……与党幹事長

バジリスク（幼女のミサ）

バジリスクの声

○前話リプライズ／ヘイズ・ピット

激しくブレる画面。研究員達の怒号と悲鳴。
明滅する光。

○地下祈禱室

入ってくる賀茂、愕然。
陰陽道の修行僧ら、喉をかきむしりながら一斉に倒れ、もがいている。

賀　茂「何が起っている!!!?」
ピットへ連なる通路、奥より光が明滅している。

○湾岸

おおおおおおんんんんん――
霧の立ち込める東京湾内の海上に、巨大なる尖塔の門が、未だはっきりとはしないながらも実体として現出し始めている。
アベックや散歩していた人らが何事かと指差してそれを見つめている。

○街路

恵理とみすず、帰宅途中。
と、恵理、ハッと電柱の陰の中に立つ人影を見る。

みすず「？　どしたの恵理」

恵　理「――（呟き／手を口元へ）薫……？」
俯いて立つ影。まるで平面の様に実体感がない。

みすず「（見えない）薫？　どこ……（ハッ）」
みすず、恵理を凝視。

恵　理「……な、なんでもない……」

みすず「――見える、の……？」
無意識に口元の手を額へ映し隠そうとする恵理。

恵　理「（目を見ず、作り笑み）な、何が……」
みすず「――恵理も――、見える様になっちゃったんだ……」
恵理、『言わないで』と言おうか迷い――、
恵　理「――見えないんだったら!!」
叫び、走り出す恵理。
表情を消し見送るみすず――。

○赤い部屋

亮子から顔の傷の手当てを受けているミサ。
リリーはいつもの様に座っており、田上は居心地悪そうに壁にもたれ立っている。
ミ　サ「あたし、ママに会ったよ……。子どもの時の」
亮　子「――」
ミ　サ「――地獄の門が開くよ、って教えてくれたの」
亮　子「……」
田　上「地獄の門？」
亮　子「今の私には判らない。私には、先のことが少し判るだけ」
田　上「地獄の門とやらが開くと、何が起こるんだ」
ミ　サ「――生きている者と、死んでいる者とがいる境界が崩れて、この世界は地獄の延長になる」
田　上「!?　何だって……？」

○東京の街／点景

人の往来が少ないのは、未明だからなのか――。
街のそこにある陰。その陰の中に、更に漆黒の何かが蠢いている――。
ミ　サ「（オフ）もう、開き始めようとしている。けど、本当にそれが開くのは、大いなる災厄があった後――」

○赤い部屋

と、テーブルの上の救急道具がカタカタと揺れる。

田上「！――（見回し）」
その揺れは微震のまま収まった。だがそれは――
田上「――近いのか……、東京が壊滅する程の――地震……」
バン！　ドアが開き飛び込んでくる恵理。
田上「――君は……」
ミサ「恵理……」
恵理「いてくれた！　良かった……、ミサ……あたし……」
泣きそうな恵理――。

ミサ「――あたしは、肉体を一度棄てていた。お蔭で、あたしの魔術の力は以前よりもずっと衰えている。今のあたしだけの力では、地獄の門を開けようとしている者を止める事は出来ない……」
田上「――で、どうするんだ」
ミサ「――一人ではなく、何人かの魔女の力を束ねる」
恵理「――どこにいるの？　ミサ以外の魔女って」
田上「（やや苛立ち）今から捜すのかよ！　幾ら俺が人探し屋だって言ったって――」
ミサ「捜すのではなく、新たに魔女になって貰うの」
亮子「――あたしたちの事……？」
ミサ、頷く。
恵理「――あたし、なる。なれるんだったら、あたし魔女になりたい！」
と――、リリー、すっと立ち上がって、ミサを囲む輪に加わる。
微笑み受け入れる亮子。
田上「――！」
ミサ、田上を見つめていた。
田上「ちょ、待てよ。俺は男だぞ。男が魔女なんておかしいだろ？」
亮子「（微笑）ウィッチ、ウィッカは本来、女に限定した言葉ではないのよ」
田上「だからって――、マジかよ……」

○ヘイズ・ピット

横穴（共同溝）から姿を現す賀茂。
奈落を見下ろす。
気を失い倒れている若い研究者達の姿が見える。

そこにいる者の視点。
巨大な獣の吐息の様な音――。
見下ろす賀茂の姿を捉えている。

賀　茂「門は私が作っているのを知っているだろう？　あれは一体何なのだ！　勝手に何をするつもりなんだ!?」
吐息、哄う。

賀　茂「この東京を荒野に均し、正しき霊的都市を築こうという私を助けてくれるのではなかったのかァァァッ!!!?」

○街頭テレビ画面

画面一杯に映し出される政治家の顔。
T「桜木周一郎幹事長」

桜　木「（虚ろな目）東京を霊的都市として再構築し、陰陽寮を復活させるという悲願を果たすが為に、私は前幹事長を始めとする政敵を呪法による処刑を命じてきた……」
と、おもむろに幹事長、スーツのポケットから拳銃を取り出し口を開いて銃口を突っ込む。
即座にブルーの画面。
S「しばらくお待ちください」

○国会議事堂前

車の走らない道に、風に吹かれ、飛んでくる紙片。
既にその機能と役目を終えた、ひとがた。

○岸田の部屋（もしくは南淵高校美術室）

千々に破られ床に散乱するスケッチやキャンバス。
うなだれ立っている、岸田。ドア脇に立っていた父の雄彦、ポケットから厚い封筒を出し、床に放る。

雄　彦「――お前ももう大人だよな。一人でやっていけるよな」

岸　田「――」

雄　彦「（涙が滲むのを拳で拭い）――じゃ……」

出て行く雄彦。
岸田、荒々しく足元のキャンバスを蹴り上げる。
静寂――。
と――、背後からか細い声。

千　砂「（オフ）――きしだ、くん……」

ハッと怯え、慌てて尻餅をつく岸田。

岸　田「（激しいうろたえ）」

部屋の隅の陰になったところで、顔をはっきり見せず俯いて立つ、ミサ――、だと岸田は思っている。

岸　田「――何で――、何で千砂の顔なんかしてるんだ！　あ、あんた魔女だって……？　（引きつった笑い）一体いつから生きてるんだ。中世の魔女狩りの時はうまく逃げられたんだな？　けど、この時代であんたたちは全滅するんだぜ――」

千　砂「きしだ、くん……」

すっ。一歩前に出る千砂。
その顔は、陰になっているが、頭部から夥しい出血した後、干からびこびりついているおぞましいものになっている。

岸　田「――（ハッ）ち、さ……」

千　砂「（オフ）痛かったよ、岸田君……。とっても痛かったんだよ……」

岸　田「ち、ち、ち……」

瞬きも出来ず見開き、痙攣の如きに身を震わせ――

○東京夜景

闇が深まっていく――。

そここに蠢く影も、その数を増やし――

○プレイルーム

嗜虐行為という欲望の為にだけ存在してきた部屋。
そこには今、蠟燭の炎だけの灯り。
テーブルを祭壇に見立て、その前で円陣を組んで座る田上、亮子、リリー、恵理。
祭祀役のミサは、プレイ用衣装のローブを被り、祈りを捧げている。

祭壇に置かれている、赤ワインで満たされたグラス。
ミサはアサメイで己の指先を切る。
血玉が浮かぶと、それをワインの中へ絞り落とす。

ワイングラスを回し飲みする一同。
戸惑いが隠せない田上、落ち着いている亮子。
何か期待感にある恵理、そしてリリー。

呪文を唱和する一同。
「（台詞オフ）エコォ、エコォ、アザラーク、エコォエコォ、アザラーク、エコォ、エコォ、ザメラーク、エコォ、エコォ、アラディーヤ、エコォ、エコォ、ケルノノース――」

○イメエジ／東京の空

まるで夜の空が、雷雲の如くに渦を巻く――。

○プレイルーム

一人づつ祭壇の前に立たせ秘儀参入儀礼を施すミサ。
俯いている恵理の前で、アサメイで五芒星を描く。
と、亮子はアサメイに口づけをする。

同じ事をリリー、田上、そして亮子が。

亮　子「――私、本当に魔女に、なれた……」

五人の『魔女』達が五芒星の如きに座し、手を繋ぎ合って、目を閉じている。

ミ　サ「――底無しの深みにある、純粋なる悪意――。それが我の敵であるなら、そこへの道を示したまえ――」

五人が囲む中央の床が、液体の様にどよんと蠢き、徐々に渦を巻き始める。

田　上「（薄目を開け）――お……」

ゴオオオオオ……　渦は円筒型の縦穴となって、地下へ伸びていく。

床の渦――、その内側より、獣の咆哮が聞こえる。

ミ　サ「――バジリスク！」

渦の奥底深くより、禍々しく、長大な何かが急速に這い上がってくる気配。

ミ　サ「唱和して！　ヴィーステ・イグト・ナム！」

四　人「ナム！」

唱和した声が部屋中に谺し、音の波は光となって視覚化され渦の中へ降りていく。

獣の咆哮が一際大きく聞こえた。が、渦の奥底より来る者の気配は依然強まっている。

ゴオオオオオオオオオオ！

恵　理「（目を閉じたまま／怯え）なっ、何が来るの!?　みっ、ミサ!?――ミサ!!」

ミサの顔には、博美が魅入られた時の様な黄昏色の光が当たり、苦悶の表情を浮べていた。

田　上「どうした!?　おい!!　どうしたんだ!!!?」

○ミサのヴィジョン

直径数mの光のトンネルの中にいるミサ。

その向こうには――、地獄門。

ミ　サ「――」

薄く開き始めている門の内側に、誰かが立っている。
それは――、ミサ自身なのか……？
ミ　サ「――あたしが……いる……」
門の内側にいるシルエットの少女はミサに手招きをしている。
ミサ、すっと手を前に出す。と、ミサの躰は光のトンネルの力で地獄門に引っ張られ始める！
と！　そのミサの手を掴む、包帯の手。
ミ　サ「――!?（包帯の手の主を見る）」
リリー「（はっきりと）ヴィーステ・イグ・ナン!!」

○プレイルーム

ドオオオッ！　床の渦が閃光に包まれる。
ミサはリリーによってそこに引きずり込まれる事を免れた。
田　上「い、今何が……（ハッ！）」
床の渦の光、徐々に消えていく。その間際、その渦の壁面には人工的な構造体が見え――消える。
田　上「今見えた縦穴――、多分、サウス・ゲート・シティの建設現場だ……」
ミ　サ「――あたしに、自分で来いって言ってるんだ……」
田　上「（苛立ち）誰がそんな事言ってるんだよ!!　化けモンでもいるってのか!?」
ミ　サ「――純粋なる悪意……、確かに化物……」
恵　理「行っちゃ駄目だよ、ミサ……。絶対帰ってこれない！
あたし判るもん！（泣きだす）みんな、みんなそうやってあたしの前からいなくなっちゃう！」
ミサ、呆然と恵理を見つめる。
ミ　サ「……恵理？」
恵理の頬を伝う涙に、そっと指で触れさすミサ。
ミ　サ「――どうして、あたしの為に泣くの……」
恵　理「だって――」
ミ　サ「――」

恵　理「友達なんだよ!?あたしたち！」
ミ　サ「――（極く、極く僅かに微笑み／亮子に）恵理を」
　　恵理の肩をそっと抱き、亮子、頷く。
ミ　サ「リリー、ありがとう……」
リリー「……」
　　ミサ、田上に感謝の気持ちを込め一瞥し、出て行く。
田　上「――（じっと考え）」

○街

　　霧が深く立ち込めている。
　　戦車の走行音が遠くから聞こえる。
遠方のアナウンス「只今、この地域には外出禁止勧告が出されています。住民の皆さんは外出を極力控えてください――」
　　そこを歩いていくミサ。後から続く田上。
　　田上、ドアを開けっ放しで斜めに止まっている古いスポーツカーを見つけ、ミサを呼ぶ。

○車内

　　殺伐とした街中を走る車中――。
ミ　サ「――（ポツリと）あたし一人で行くつもりだった……」
田　上「――なんでついて来るんだよって話か」
ミ　サ「――」
田　上「俺は――、俺はあいつが言った事を自分で確かめたいんだよ（露悪的に）」
ミ　サ「――『黒井ミサが東京を呪い殺す……』」
　　暫し黙る二人――。田上、吐した言葉を悔いている。
　　と――、窓外に、死者の影が過る。
田　上「――俺は、あいつらと同じなのさ……」
ミ　サ「え……？」
田　上「俺はもう死んでるんだ。警察官として一番やっちゃならない事をやった時に……」
ミ　サ「――（じっと横顔を見る）」

田　上「魔女か……。（自嘲）俺に言わせりゃ、あんたは普通の女の子さ……」
ミ　サ「……」
田　上「だからな、あんまり自分を追い詰めんな」
ミ　サ「……」

○サウス・ゲート・シティ建設現場

無人の巨大な建設現場のゲートに入っていく車。
その現場の後方には――、地獄の門が迫っている。

○ヘイズ・ピット／最上部

二人、ヘイズ・ピット最上部にやってくる。
田上、階段を見つけ
田　上「おい、こっちだ！」

狭い急峻な階段を下っていく田上と、ミサ。
田　上「足元気をつけろ」
ミ　サ「……」
田上、下を覗き込むが、奈落は闇に落ちていて暗い。
田　上「くそ……。どれだけ下ればいいんだ……」

延々と下っていく二人――。
階段というより、梯子に近い。
その場を圧する音は換気扇の音なのか、獣の吐息か。
中層まで降りたが、未だ奈落へは遠い。
流石に疲れ、立ち休むミサと田上。
田　上「――（はあ、はあ、はあ）情けねぇな……」
ミサ、ある気配に気づき、警戒の眼で見回す。
田　上「（気づかず）これでも柔道部じゃ脚は早い方だったんだぜ。ま、今の俺見ても信じられないだろうが――」
田上、愕然と前方を見る。
虚空に顔が浮かんでいた。

田　上「なっ……」
　それは――、額田サキコだった者の怨念。
　ハッと振り向くミサ――、アサメイを構えよとするも、落としてしまう。
ミ　サ「あっ！」
　サキコの怨霊、黒い腕をミサに伸ばし――、一気に引っ張る。
田　上「ミサ！」
　慌ててミサの脚を掴もうとするが――、ミサは黒い影に引きずり込まれ、奈落の闇の中へ転落していく。
田　上「ミサァァァッッッ!!（悲痛）」

暗転

○インフェルノ

　地面に横たわるミサ――。
　そこは――、荒野の東京――。
　向こうには瓦解したビル。燃え尽きた自動車――。
　未だ瓦礫の向こうには炎と煙――。
　ミサは、辺りを見回す。
ミ　サ「――ここは……」
　無人なのか――。
　否――、そこここに、植物的に立っているぼんやたとした人間の影――。
ミ　サ「――死者が歩き回る廃墟――これは、近い未来の、東京」
　怯えと、哀しみ――。それを自らの意志で振り払い
ミ　サ「これはまだ現実ではない!!　姿を見せなさい！　お前の名を呼ぶ！　バジリスク！　純粋なる悪意！」
　名を呼ぶ事で一つの呪縛を打ち払うミサ――。
　と――、猛々しい獣の息。
ミ　サ「！（身構える）」
　姿を現す、緑色の巨大なる邪蛇。ミサに襲いかからんと、毒牙を向け――

○ヘイズ・ピット／階段

田　上「ミサァァァッ！　ミサァァァァァァッ！」
名を呼びながら、必死に階段を下る田上。

○インフェルノ

迫る邪蛇！
ミ　サ「（アサメイ構え）セネンツテ、パテト、サタイウ！　アンレハカタ、サタイウ！　ハウバイルラ、ハアリ!!!!」
七芒星を描くミサ！　その光はバジリスクを捕らえ
――破邪！
――ホワイトアウト――
ミサと、精霊状態のミサが対峙する。
ミ　サ「――誰なの……」
精霊ミサ「（やや大人びた声）もう気がついているんでしょ」
ミ　サ「（認めたくない）」
精霊ミサ「この街は、ここに住む者達の邪悪な心で穢され呪いで満ちた」
ミ　サ「――」
精霊ミサ「魔女としてあたしが持つ力、何の為に存在していいるのか。闇に落ちていくこの街の行き先を変える事なのか」
ミ　サ「……」
精霊ミサ「時の流れの中で触れ合った人間の、幾人かは魔術で救う事もあったけれど、そんな事の為に魔術があるのではない――。だとしたら、この街が滅びに向かうのなら、それを正しく導く事こそ闇の力に仕える魔女の役目ではないのか――」
ミ　サ「（意を決し）それが認められないって言っているのよ!!」
精霊ミサ「（微笑の吐息）そう。だからあたしは肉体を棄て、分裂した。人を、街を呪う事が出来ないあなたと、本当の黒井ミサとに……」
ミ　サ「――あなたが本当の黒井ミサ？　（違う違う違う！）」

○ヘイズ・ピット／奈落

やっと薄暗い奈落へ降り立つ田上。

田　上「ミサ！　ミサ!?」

見回す田上――、暗然。（研究員の姿は既に無く）

苦悶の表情を浮べ、屍となっている賀茂――。

田　上「――時代を間違えた陰陽師か……」

くすくすくす……。

幼女の笑う声にハッとなり顔を上げる田上。

『玉座』にポツンと椅子が置かれ、そこに幼い女の子が座って田上を見ていた。

田　上「――な……？」

○インフェルノ

精霊ミサ「その弱さは何事？　黒井ミサはそんなに弱い魔女だったかしら？」

頭を抱え、必死に抵抗するミサ。

精霊ミサ「あたしは自分の力で地獄の門を喚起したのよ。これ程大きな魔術を行使した魔女はいないわ！　これが黒井ミサの強さ、黒井ミサの魔術！」

と、ミサの額に夥しい血が流れ始める。千砂の血だ。

ミ　サ「（手についた血を見て）!!」

精霊ミサ「既に滅びた、弱い人間の肉体なんかを借りているあなたは黒井ミサの影でしかないのよ」

言葉で追い詰められ、激しく動揺しているミサ。

○ヘイズ・ピット

『玉座』の幼女にゆっくりと近づく田上。

恐怖が次第に背中から覆いかぶさっていく。。

田　上「――こ――、この子が……、黒井、ミサ……？　（ハッと賀茂の屍に振り向き）――この子がやった……？　純粋なる、悪意……？」

幼女、上目遣いに田上を見つめ、ニッコリと微笑む。
ゾクッとなる田上――

○インフェルノ

ミ　サ「――（俯いたまま）――やっぱり、違う……」
精霊ミサ「――何が……？」
ミ　サ「――魔術の強さなんかじゃ、ない……」
精霊ミサ「――」
ミ　サ「――魔女も人間なの……。人の心無くして闇の力を使うだけの存在にはなりたくなかった――」
　ミサ、真っ直ぐに顔を上げる。
ミ　サ「そういう生き方を――、あたしは選んだのよ！」
精霊ミサ「それ故に、魔術の強さも、肉体をも失って？」
ミ　サ「――あなただって、東洋の魔術師の力がなければその肉体も復活出来なかったじゃない」
　ニッ、と笑うミサ――。
　と――、ミサの前に立っているのは、幼女。
精霊ミサ「（オフ）もう地獄の門は開き始めている――。どちらが本当であるかなんて、最早意味のない事」
　ミサの眼、鋭く光る。
ミ　サ「意味は、あるわ！」

○ヘイズ・ピット

田　上「!!」
　驚きに身を引く田上。
　いつの間にか、ミサが田上に背を向けて立ち、玉座の幼女の首に手をかけている（力は入れず）。
田　上「ミサ!!（どうするんだ!?）」
　じっとミサは幼女を睨んでいる。
　ニコニコと見上げている幼女――。
ミ　サ「――もうあたしは、闇の力を行使する事に何の躊躇いもない――。この手に力を入れる事だって」

幼　女「……（ニッコリ）」
ミ　サ「――（力強く宣言）あたしが、黒井ミサなの」
すっ、と幼女の頸から手を離すミサ――。
小さく息を漏らす田上――。
賀茂の声「バジリスクは一つになった、か……」
ハッと見る田上。
暗がりの中に立つ男――。賀茂だ。
田　上「（愕然）あ、あんたは死んで……」
賀　茂「認めたくないが――、やはり我が血脈は究極の場面で敗れ去る運命＜さだめ＞にあったらしい」
ミ　サ「地獄の門を開いたのがあたしなら、このあたしが閉じる」
賀　茂「――（軽く哄い）地獄の門は外から閉じられないのだよ」
田　上「何だって……（ミサを見る）」
ミ　サ「――」
田　上「――まさか、ミサ――」
ミサ、階段に向かって走り出す。
田　上「くそっ！　待てよミサ！」
ミサを追って階段へ。

玉座に座っている幼女ミサ――、その膝に頭を乗せ安らぐ、賀茂を撫でる――。

○埠頭

工事現場から青い顔で歩いてくる田上。咳き込み、動悸を必死に掌圧で抑えようとしている。
田　上「（見回し）みっ――ミサ……、!!」
ミサが立つ岸壁まで、地獄門から道が伸びていた。
開きかかっている門の中から、道を通って死者達の群れがこちらまで来ようとしている。
ミサ、アサメイを持ち門に向かって歩み出している。
田　上「ミサァァァァァァッ!!」
ミサ、振り向く。
田上、必死にミサの許まで走ってくる。

ミサ「――さようなら、田上さん――」
田上「帰って来ない気なのか」
ミサ「ありがとう――（クスッと笑み）魔女さん」
ミサ、行こうとするのを、グッと腕を掴む田上。
田上「――俺に行かせてくれ。俺が閉じる」
ミサ「――」
田上「――こういう時はな、男が行くもんなんだよ」
探る様な目で田上を見つめていたミサ――
ミサを眩しそうに見つめる田上の、『目』――。
田上「道を途中で間違えた屑の人間でも、出来る事があるんなら――（『そんな事じゃない』と被りを振り）――頼む」
ミサ、田上の気持ちが判った。
田上「――（微笑）俺も、魔女なんだしな」
見つめ合う二人。
ミサ、アサメイを手渡す。
受け取る時のほんの刹那に、触れ合う二人。
田上、未練無くミサに背を向け、地獄門に向かって走っていく。
ミサ「――」

開いた門の内側で、眩い赤き光が広がっていく。
ミサ「――地獄の門よ――、沈みたまえ――、ここが地獄となる時まで――」
地獄門、沈んでいく――。
ミサ「――」

それからどれくらいの時が経ったか――。ミサは何も無かったかの様な海に向かって、同じ場所に立っている。
と――、ミサ、目を自分の脇にやる。
幼女のミサがすぐ脇にいてミサを見上げていた。
見つめ合う、二人のミサ。

暗転

海から街に向かって遠ざかっているミサの後ろ姿。
一人になっている、ミサ――。
ミサ「（オフ）エコォ、エコォ、アザラーク――。
エコォ、エコォ、ザメラーク――」
街の中へ消えていくミサ――。
日常の音が高まっていくが――、少しづつ、低い地
鳴りの音が重なっていき――

エコエコアザラク－眼－　完結